

杖道とは

◎杖道とは……。

杖道は古来から伝わる武道のひとつです。長さ128センチ、直径2.4センチの白樫の丸い棒（杖）を武器とし、打ち掛かる太刀を相手に「突かば槍、払えば薙刀、持たば太刀、杖はかくにもはずれざりけり」と伝書にもありますように、太刀、槍、薙刀の技に独自の動きを加味した誠に玄妙多彩な武道です。見た目には只の杖に過ぎませんが、正面はもとより左右から繰り出す杖先の一撃には予測を越えた鋭さが秘められています。

杖道の稽古では、紺または白の剣道着および袴を着用しますが防具は一切使用しません。そのため普段の稽古は立合の形だけで行います。打ち込んでくる太刀を捌き、すかさず杖で太刀の動きを制するというもので、形稽古とはいえ真剣勝負に近い稽古方法といえます。

◎全剣連杖道の起源は……。

私たちが日頃練習している杖道は、全日本剣道連盟が制定した基本12本と立合の形12本です。杖道が全剣連に加盟したのは昭和31年（1956年）のことですが、その後12年間の研究期間を経て昭和43年（1968年）に全剣連制定杖道が誕生しました。さらに平成13年（2001年）から2年間にわたって指導上の留意点を付記した本格的な見直し作業を行い平成15年（2003年）に改訂版が完成しました。その後、一部修正を行い、平成20年6月に現在の全剣連杖道（解説）となっております。

全剣連杖道の原形は、約四百年前に夢想権之助勝吉という人によって創始された神道夢想流杖術です。夢想権之助は剣の達人でしたが、あるとき宮本武蔵と試合をして破れたため、武蔵を破るべく筑前太宰府の宝満山に籠って創意工夫の結果編み出したのが、神道夢想流杖術です。口承では杖をもって武蔵の十字留を破ったともいわれています。神道夢想流杖術は明治になるまで福岡を中心に継承されてきましたが、昭和5年（1930年）に清水隆次先生が福岡から上京、翌6年警視庁の武道講師（囑託）となり、その後昭和31年に全剣連に加入、現在の全国的普及の礎をつくりました。

◎杖道の試合……。

本大会では、初段から7段まで段別に指定された全剣連杖道の立合の形6本を演武します。試合は打太刀と仕杖がペアを組み、紅白2組のペアが演武を競い合います。どちらの組が優れているかの判定は杖道試合審判規則・同細則によりますが、初段から3段までは礼法・着装はもとより解説書に則した正しい姿勢と正確な打突、充実した氣勢と気迫の籠った気合、目付け、残心などが勝敗のポイントになります。4、5段クラスになりますと、さらに錬熟度が求められます。正確な切り付けと刃筋、間と間合、杖の用法、気・杖（剣）・体の一致など打太刀の技倆と仕杖の技前が相対的に判断されることになります。6、7段ともなると、一挙手一投足が武道としての合理性を備え、理合に適った攻防が演武の形を離れて真剣勝負を彷彿させるだけの迫力を有することが大切とされます。云い換えれば、いかに一瞬一瞬に己れの全身全霊を尽くすかということが大切なわけです。